

## 自ら考えたり工夫したりしながら動きの課題を解決する

### 子どもを育てる体育科学習指導

#### ～自己の課題を捉え、解決に向けた練習方法の見通しをもたせる支援の在り方について～

#### 要約

現代社会を生きる子ども達を取り巻く生活環境は大きく変容し、子どもが外で運動遊びをするための重要な3つの要素（「時間」「空間」「仲間」）が減少している。その結果、体育の授業以外に全く運動しない子どもたちが増加しており、日常的に運動をしている子どもとそうでない子どもの二極化傾向は深刻さを増している。これらの課題を踏まえ、小学校体育においては、運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識などを培い、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を確実に育成することが求められている。

本学級の子子ども達は体育の授業が好きで、意欲的に参加するものの、運動に対する自信をもてていない子どもも多く、運動が「どちらかと言えば苦手」または「苦手」だと感じている子どもは学級の約45%にも及ぶ。また、他の運動領域に比べ、特に器械運動の「マット運動」に対して苦手意識をもつ子どもが多く、マット運動が「好き」と回答した子どもは約40%にとどまった。

そこで、本研究では、「できる」「できない」がはっきりした器械運動の学習の中で、特に本学級の児童が苦手意識をもつ「マット運動」の学習において、全ての子どもが仲間と関わる過程で、動きの課題解決に向けて自ら考えたり、工夫したりする能力を育みながら、動きを高める喜びを味わうことができるような支援の在り方を追究したいと考え、以下の3つの支援に重点を置き、研究に取り組んだ。

- 見本となる動画を異なる角度や速度で再生し、技の理想的な動きのポイントを理解しやすくする。
- 自身の動き(映像)を見本や動きのポイントと比較させ、自己の課題を具体的に捉えやすくする。
- 練習後の自身の動き(映像)を確認させ、自身の動きの高まりや修正点を把握しやすくする。

実践の結果、以下のような成果（○）と課題（●）を得た。

- 見本となる動画を角度や再生速度を変えながらじっくりと確認したことで、理想的な動きのポイントをより明確に理解させることができた。
- 各技の動きのポイントを模造紙にまとめて掲示したことで、次時以降の学習の中で常時、技のポイントを再確認させることができた。
- 録画した自身の動きを見本の動画や動きのポイントと照らし合わせながら確認させたことで、自己の課題をより客観的に捉えやすくすることができた。
- 練習後に自身の動きを映像で自己評価させたことで、自身の動きの高まりや修正点を客観的に認識させることができた。
- グループに分かれ、お互いに技を見せ合い、動きや練習方法について助言し合いながら練習させたことで、即時的なフィードバックを得ることや、子どもどうしの肯定的な関わりを生むことにつながった。
- 自己の課題をより具体的に捉えさせるための映像を分析する際の視点の検討。
- 課題解決に向けた練習方法の見通しについての思考の変化に対する評価方法の検討。

**キーワード：**映像、自己評価 課題解決 方法の見通し 考える 工夫する 助言・協力

## 1 主題設定の理由

### (1) 社会的要請・現代教育の動向から

現代社会を生きる子どもたちを取り巻く生活環境は大きく変容している。特に生活様式の変化に伴い、子どもが外で運動遊びをするための重要な3つの要素（「時間」「空間」「仲間」）が減少している。その結果、体育の授業以外に全く運動しない子どもたちが増加しており、日常的に運動をしている子どもとそうでない子どもの二極化傾向は深刻さを増している。これらは、保健体育科の目指す「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する」ための大きな課題となっている。

これらの課題を踏まえ、小学校体育においては、運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識などを培い、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を確実に育成することが求められている。

「運動に親しむ資質や能力」の育成について、学習指導要領では、子どもの能力・適性、興味・関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が必要であることが述べられている。

そこで、自己の能力に適した課題を捉え、技を身に付けたり、新しい技に挑戦したりすることにより、運動の楽しさや喜びを味わうことのできる本研究で、自ら考えたり工夫したりしながら動きの課題を解決しようとする子どもを育てることは意義深いと考え、本主題を設定した。

### (2) 児童の実態から

本学級の児童36名に対して行った体育科の学習に関するアンケート調査では、体育が「好き」または「どちらかと言えば好き」と答えた児童は32名であるのに対し（「どちらかと言えば嫌い」が3名、「嫌い」が1名）、運動が「どちらかと言えば苦手」または「苦手」だと感じている児童が16名もいることが明らかになった。このことから、本学級の児童は体育の授業が好きで、意欲的に参加するものの、疑似体験の不足から運動課題の解決に対する自信がもてないことで、十分に技能を身に付けることができずにいる児童が少なくないことが推測される。また、休み時間の様子を見ても、ほとんど毎日室内で過ごしている児童も複数見受けられる。このことから、体育の授業において、動きの課題を解決できず、運動の楽しさや喜びを十分に味わうことができていない児童がいることが考えられる。

次に、同調査における体育科の各運動領域についての質問では、器械運動が他の運動領域に比べ「ふつう」または「嫌い」と答えた児童が最も多かった。また、器械運動の種目別でも同様の質問をしたところ、「マット運動」が最も好まれていないということが明らかになった。さらに、マット運動を好まない理由をたずねたところ、「技ができないから」という理由が最も多く（82%）、「どうすればうまくいくのかが分からないから」という理由が2番目に多かった（73%）。このことから、児童がマット運動を好まない大きな要因として技能の習得が難しく、「できない・苦手」という意識をもつ児童が多いということが明らかになった。

学習指導要領解説「体育編」では、器械運動が、「できる」



「できない」がはっきりした運動であるとした上で、全ての児童が技を身に付ける喜びを味わうことができるよう、自己の技能の程度に応じた技を選び、一人ひとりが自己の課題をもって工夫しながら取り組み、仲間で互いに励まし合い、助け合っ、学習を進めていくことが重要であると述べている。

以上のことから、本研究では、「できる」「できない」がはっきりした器械運動の学習の中で、特に本学級の児童が苦手意識のもつ「マット運動」の学習において、全ての児童が仲間と関わる過程で、動きの課題解決に向けて自ら考えたり、工夫したりする能力を育みながら、目標とした動きに近づく喜びを味わうことができるような支援の在り方を追究したいと考え、本主題及び副主題を設定した。

## 2 主題・副主題の意味

### (1) 主題のもつ内容

「動きの課題を解決する」とは、理想的な動きのポイントを理解し、自分の動きの課題を修正して、できるようになることである。つまり「動きの課題」は児童一人ひとりによって異なる内容であり、同じ技であっても向かう目標は児童によって異なる。「自ら考えたり工夫したりしながら動きの課題を解決する子ども」とは、自分が身に付けることができている技の動きのポイントを理解し、「どの部分をどのように改善すればできるようになるのか」を考え、自己の課題の解決に合った練習方法や練習の場の選択を工夫しながら、運動に取り組む子どものことである。

本研究では、「自ら考えたり工夫したりしながら動きの課題を解決する子ども」の姿を次の3つの視点から捉えるものとする。

- |   |         |
|---|---------|
| ○ 自分の目標とした動きに近づけることができる子ども。   | 【技能】    |
| ○ きまりを守り、友達と協力したり、話し合ったりしながら、進んで動きの課題を解決しようとする<br>ことができる子ども。                          | 【態度】    |
| ○ 自身の動きを見本と比較したり、友達から助言を受けたりしながら、自己の動きの課題を考え、<br>技ができるようになるための練習の方法や場所を工夫することができる子ども。 | 【思考・判断】 |

### (2) 副主題のもつ内容

課題解決に向けた「方法の見直しをもつ」とは、自己の動きを、技の「正確さ」「美しさ」「なめらかさ」の観点から見直し、自己の課題を具体的に捉え、その解決に適した練習方法や場の工夫を選択することである。副主題における「支援」とは、次の2つの内容から成り立つ。

- |   |
|---|
| ① 子どもに技の理想的な動きのポイントを明確に理解させるための支援         |
| ② 自己の課題を具体的に捉え、その解決に向けた練習方法の見直しをもたせるための支援 |

体育の学習場面では、運動課題に取り組んだ結果について、「どうしてうまくできなかったのか（うまくできたのか）」を振り返りながら課題を明らかにし、「どうしたら（もっと）うまくいくのか」を考えて練習方法や場所を工夫しながら課題の解決を目指す過程が重要である。

そこで本研究では、子どもが自己の課題を明確に捉え、その解決に向けた練習方法の見直しをもたせることができるよう、次の3つの支援を行う。

- |  |
|--|
| ① 見本となる動画を異なる角度や速度で再生し、技の理想的な動きのポイントを理解しやすくする。 |
| ② 自身の動き(映像)を見本や動きのポイントと比較させ、自己の課題を具体的に捉えやすくする。 |
| ② 練習後の自身の動き(映像)を確認させ、自身の動きの高まりや修正点を把握しやすくする。   |

### (3) 主題と副主題との関係について

子ども達は、「どこをどう改善すればうまくできるようになるのか」という自己の課題や「何のために、この練習をしているのか」という目的意識、さらには「どのような姿になればよいのか」という目標を明確に捉えることができた運動課題に対しては自ら考えたり、工夫したりしながら意欲的に活動に取り組む。しかし、そうではない場合、子ども達は、できない理由（自己の課題）が分からず、目標が不明瞭になり、運動に対する目的意識が芽生えない場合も少なくない。また、技を身に付けた友達の見本や一連の動きを示した図などを見て、目指すべき姿（目標）が分かり、その姿に向かって練習するという目的意識をもてたととしても、その技を身に付けるための自己の課題を明らかにできなければ、効果的な学習ができず、限られた時間内に技を身に付けることが困難になってしまう。これでは、技が「できた」という達成感や充足感を感じることができず、運動の楽しさや喜びを味わうことのできる体育科学習には成り得ない。子どもが意欲的に学習に取り組むためには、理想的な動きのポイントを明確に理解させるとともに、技を身に付けるための自己の課題を具体的に捉えさせ、その解決に向けた練習方法の見通しをもたせる支援が必要であり、これらの支援を行うことによって、自ら考えたり、工夫したりしながら動きの課題を解決しようとする子どもを育むことができると考える。

## 3 研究の目標

第4学年体育科の器械運動（マット運動）の学習において、自己の課題の認識、及び課題の解決に向けた見通しをもたせることに寄与すると考えられる3つの支援を実践し、その有効性を検証する。

## 4 研究の仮説

第4学年体育科の器械運動（マット運動）の学習指導において、技の理想的な動きのポイントを理解させるとともに、自己の課題を具体的に捉えさせ、その解決に向けた練習方法の見通しをもたせることができれば、自ら考えたり工夫したりしながら動きの課題を解決する子どもが育つであろう。

## 5 仮説検証の内容と方法

(1) 検証対象：小郡市立三国小学校 第4学年2組（計36名）

(2) 検証の内容と方法

- ① 自分の目標とした動きに近づけることができたか。
  - ・ 練習前後の動きの高まり、及び実技テストの結果から分析する。
- ② 練習方法や場所を工夫しながら、進んで運動の課題を解決しようとすることができたか。
  - ・ 学習プリントの記入内容、及び活動中の様子から分析する。
- ③ 動画や動きのポイントから自己の課題を考え、練習方法や場を工夫することができたか。
  - ・ 活動中の様子を踏まえ、学習プリント及び、単元終了後のアンケートの結果から分析する。

	アンケート	学習プリント	ビデオ	写真	実技テスト
①技能			○		○
②態度		○	○	○	
③思考・判断	○	○	○	○	

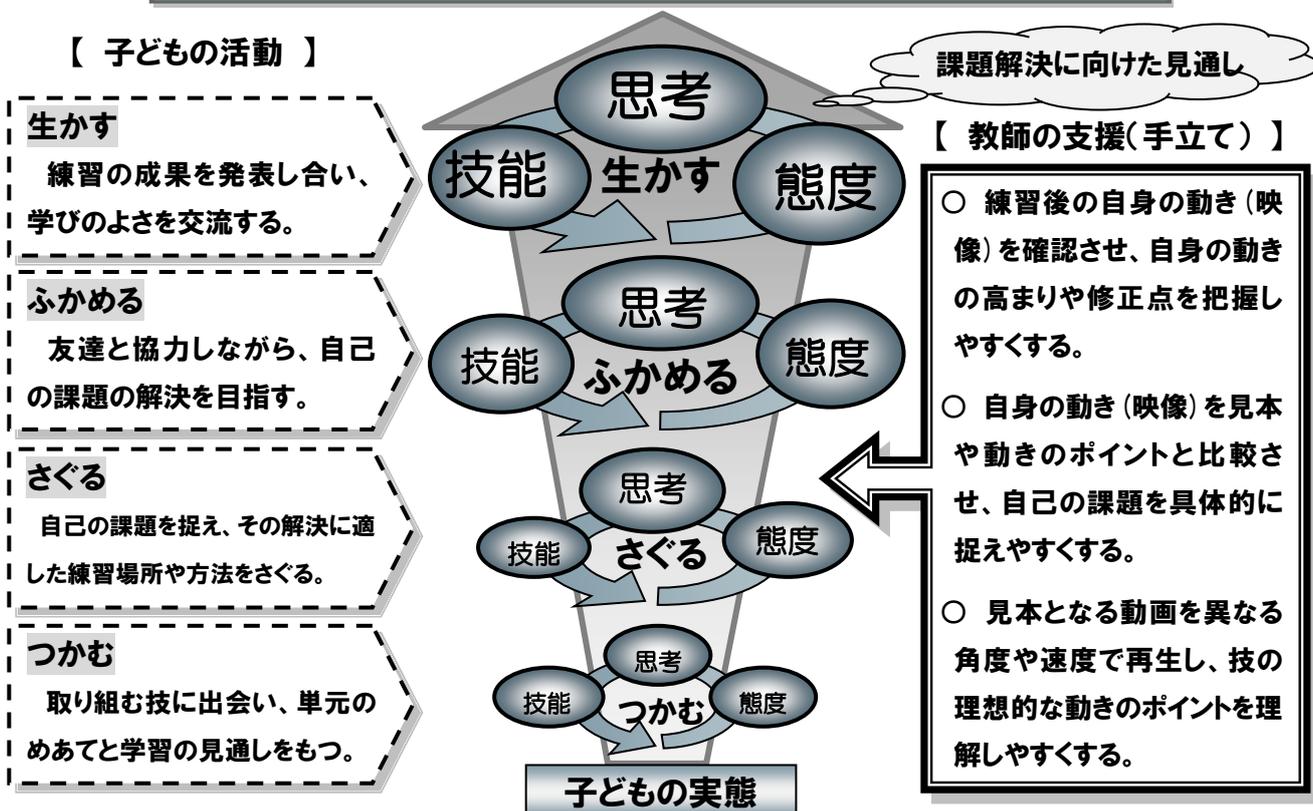
項目	評価	評価の観点
技能	A	4つの基本的な技、及び2つ以上の発展技において、自分の目標とした動きを身に付けることができる。
	B	4つの基本的な技において、自分の目標とした動きに近づくことができる。
	C	3つ以下の基本的な技において、自分の目標とした動きに近づこうとしている。
態度	A	練習方法や場を工夫しながら、進んで動きの課題を解決しようとするすることができる。
	B	練習方法や場を工夫しながら、動きの課題を解決しようとするすることができる。
	C	動きの課題を解決しようとする努力することができる。
思考判断	A	自己の課題をよく考え、進んで課題の解決に向けた活動を工夫することができる。
	B	自己の課題を考え、課題の解決に向けた活動を工夫することができる。
	C	自己の課題を考え、課題の解決に向けた活動を工夫しようとするすることができる。

## 6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5	研究主題の設定、理論研究	10	実証授業、整理分析
6	実態調査アンケート、教材研究	11	データ分析
7	教材研究	12	研究のまとめ
8	研究の吟味	1	研究のまとめ
9	仮説の検討	2	研究報告

## 7 研究構想図

### 自ら考えたり工夫したりしながら動きの課題を解決する子ども



## 8 指導の実際と考察

### (1) 実践事例

① 単元 「B 器械運動 (ア) マット運動」

② 単元計画 (8 時間)

段階	主な学習活動	指導上の留意点 (○)
つかむ	1. 取り組む技に出会い、単元のめあてと学習の見通しをもつ。 ○ 見本となる動画を視聴する。 ○ 基本的な感覚をつかむ運動 (遊び) に取り組む。 <b>「正確で、美しく、なめらかな」マット運動の技を身につけよう。</b>	○ 基本的な感覚を十分につかむことができるように、パターン化した運動を毎時間の導入部分に設定する。
さぐる	2. 自己の課題を捉え、その解決に適した練習場所や方法をさぐる。 ○ 動画を視聴しながら、各技のポイントをおさえる。 ・ 前転、後転 ・ 壁倒立、腕立て横跳び越し ・ 大きな前転、とび前転 ・ 補助倒立、側方倒立回転 ○ 各自の動きを動画で撮影し、それをもとに課題を見出す。 ○ 各技のポイントを身につけるための練習方法や場の工夫を知る。	○ 次時以降も子どもが学習中に技のポイントを振り返ることができるように、整理した各技のポイントは掲示用の模造紙に書き写す。 ○ 自己の課題をつかみやすくするために、自身の映像を見る際の視点となる技のポイントを十分におさえておく。
ふかめる	3. 友達と協力しながら、自己の課題の解決を目指す。 ○ 自己の課題に応じた練習方法や場の工夫を考えながら、達成したい技に取り組む。 <b>○○が「正確で、美しく、なめらかに」できるように、方法や場所を考えたり、工夫したりしながら練習しよう。</b>	○ 前時まで学習した各技のポイントを身につけるための練習方法や場の工夫の例を想起しやすくするために、技ごとに整理し、模造紙にまとめておく。
生かす	4. 練習の成果を発表し合い、学びのよさを交流し、単元をまとめる。 ○ できるようになった技、上手になった技を発表し合う。 ○ グループごとに友達のよさを伝え合う。 ○ 単元の学習を振り返り、学習後の感想を書く。	○ 一人ひとりが成長を実感できるように、友達同士でよさを伝え合う評価活動を位置付ける。

### ③ つかむ段階 (1 時間)

「つかむ」段階では、本単元で取り扱う各技の理想的な動きを子どもに思い浮かばせることをねらいとして活動した。そのために、見本となる動画をプロジェクターに映し、角度や再生速度を変えて提示した。技どうしを比較しながら見たり、スローモーションで再生したりしたことで、普段の教師の師範演技では演出できない運動課題との出会いを提供でき、子ども達からは「横から撮ったとび前転をスローでもう一度見たい」といった声が多数あがった。

#### < 考察 >

見本となる動画を角度や再生速度を変えながらじっくりと確認したことは、理想的な動きをより明確に思い浮かばせることに加え、子どもの技に対する関心や「技を上手にできるようになりたい」という意欲を高めることに効果的であったのではないかと考えられる。

#### ④ さぐる段階（4時間）

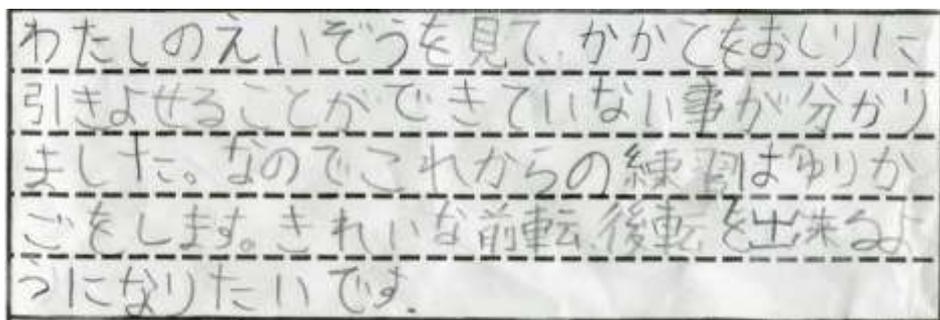
「さぐる」段階では、各技の理想的な動きのポイントを理解し、自己の課題を具体的に捉え、その解決に適した練習方法の見通しをもたせることをねらいとして活動した。そのために、まず各技の見本となる動画を角度や再生速度を変えながら確認し、各技の動きのポイントを整理した。なお、整理した各技のポイントは掲示用の模造紙に書き写し、次時以降も子どもが学習中に技のポイントを振り返ることができるようにした。次に、各自動きのポイントを意識し、試しの運動を行った。その際、活動グループに分かれ、各自の動きをビデオカメラで録画し、見本の動画や動きのポイントと照らし合わせながら、自己の課題を明らかにしていった。そして、各技の動きのポイントを身につけるために効果的な練習方法や場の工夫を教師が紹介し、それらの運動に取り組みながら練習した。例えば、前転のポイントの1つである「かかとをおしりにすばやく引きよせる」動きを身につけるために、基本的な感覚をつかむ運動の1つである「ゆりかご」の動作後にしゃがみ立ちをする、または前にジャンプするという動きを取り入れた練習方法を紹介した。

下に並べた写真は、前転及び後転を学習した時間（1/4）の際に、A児が試しの動きで行った前転の一連の動きである。A児は事前アンケートにおいて、体育の授業を「どちらかと言えば嫌い」、マット運動が「嫌い」と回答しており、運動に対して苦手意識をもっていた。



【写真①】 A児が試しの動きで行った前転の一連の動き

また、右の資料は、授業後に書いたA児の学習の記録である。この文章から、A児が自身の前転を録画した映像を見て、自己の課題の1つに気づき、その課題の解決に向



【資料①】 A児が授業後に書いた学習の記録

けた練習方法の見通しをもつことができたことが分かる。

#### < 考察 >

各技のポイントを整理する際に、見本となる動画を角度や再生速度を変えながら動きを焦点化したことは、子ども達に技のポイントを強く意識させることにつながったのではないかと考えられる。また、各技のポイントを模造紙にまとめて掲示したことは、次時以降の学習の中でそれを見て技のポイントを再確認する子どもの様子が見られたことから有効であった。

そして、A児のように複数の課題が混在しているにも関わらず、1つや2つしか課題を見出せなかった子どもが少なくなかったことから、子どもに自身の動きを録画した映像から自己の課題を具体的に捉えさせるためには、映像を分析する際の視点をより明確にする必要があると感じた。

⑤ ふかめる段階（2時間）

「ふかめる」段階では、「さぐる」段階で捉えた各技における自己の課題の解決に向けて、自ら練習方法や場を考えたり工夫したりしながら練習することをねらいとして活動した。そのために、まず、各自取り組もうとする技における前時までの自身の動きを振り返り、見本の動画や技のポイントなどと照らし合わせながら、自己の課題を捉え直した。次に、活動グループに分かれ、お互いに取り組む技を見せ合い、助言し合いながら練習させた。その際、見てもらう視点を友達にはっきりと伝えた上で見てもらうよう指導した。また、友達の技を見る側には、「どこがどのようにできていないのか」を具体的に伝えるよう助言した。そして、各自、自己の課題の解決に適した練習方法や場所の工夫を考え、実践した。場の工夫を行う際には、活動グループの友達に場の変更の意図を伝えてから協力を頼むよう指導した。



【写真②】映像で自身の動きを振り返る児童

右の2枚の写真は、各自が自己の課題の解決に適した練習方法や場所の工夫を考え、友達と協力しながら練習している様子である。子ども一人ひとりが自己の課題をよく考え、「さぐる」段階で教師が紹介した練習方法や場



【写真③・④】「ふかめる」段階の子ども達の活動の様子

の工夫の中から自分に合うものを選び、意欲的に活動することができた。

また、「さぐる」段階で教師が紹介した練習方法や場の工夫の中から複数を組み合わせたり、新たな工夫を付け加えたりするなど、自分なりに考え、アレンジして練習に取り組む姿も見られた。例えば、右の【写真⑤】は、前転の際に内またでしゃがみ立ちになって



【写真⑤】



【写真⑥】

しまうことを自己の課題と捉えたB児が赤白

ぼうしを足で挟んで練習する様子である。さらに、右上の【写真⑥】は、大マットの上に小マットを3枚重ね、その間に踏み切り板を敷いたものである。発案したC児は、学習後の記録に以下のように書いていた。この児童は、1枚のマットで後転を正確にできるまでは至らなかったものの、自分で考え出したマットでは足の裏でしっかりと起き上がることができ、満足感を得た様子であった。

大きいマットのうえに小さいマットを3枚重ねてその間に踏み切り板を敷いて、スノーボードを浮かせるように工夫しました。

【資料②】C児が学習後の記録に書いた文章

ここで、「さぐる」段階での試しの運動では全く前転ができていなかったA児の「ふかめる」段階に行った前転の一連の動きを下に並べた。



【写真⑦】 A児が「ふかめる」段階後に行った前転の一連の動き

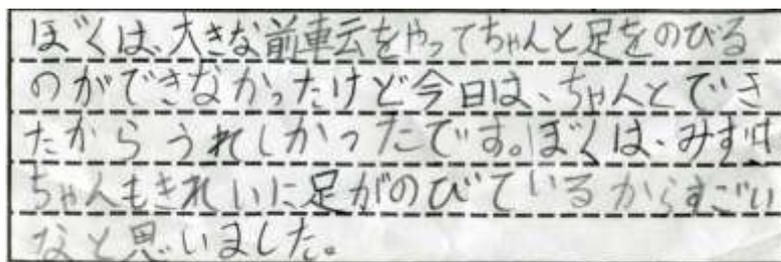
A児は、「さぐる」段階後、自身の動きを撮影した映像を見て、自己の課題を「かかとをおしりにすばやく引きよせる」ことができていないことと捉えた。そして、「ふかめる」段階では「ゆりかご」の動作後にしゃがみ立ちをする、または前にジャンプするという動きを取り入れた練習方法を選択し、繰り返し取り組んだ。すると、「さぐる」段階で行った試しの動きに比べ、すばやくかかとをおしりに引きよせることができるようになってきていることが分かる。また、「ゆりかご」に関連する練習を重点的に取り組んだ結果、順次接触（頭の後ろから背中にかけて順にマットにつけること）がなめらかになり、しっかりとおしりを浮かせてしゃがみ立ちの体勢をとることができるようになった。まだ改善の余地は残っているものの、A児は学習後に前転ができた喜びを口にしていた。

最後に、各自取り組んだ技を活動グループの友達に見せ合い、お互いに良くなったところを伝え合った。その際、グループごとに練習後の各自の動きをビデオカメラで撮影させ、自身の動きを映像で確認させた。

#### < 考察 >

右下の資料③はD児が学習後に書いた文章である。この資料から、映像で前時までの自身の動きを振り返りながら、自己の課題を捉え直したことは、本時に自分がどのような練習に取り組めばいいのかという見通しを再認識させるために有効であったと考える。

また、練習後に自身の動きを映像で確認したことは、自身の動きの高まりや修正点を客観的に認識することに効果的であった。



【資料③】 D児が学習後の記録に書いた文章

そして、グループに分かれ、お互いに取り組む技を見せ合い、動きや練習方法について助言し合いながら練習させたことは、即時的なフィードバックを得ることや、子どもどうしの肯定的な関わりを生むことにつながった。

#### ⑥ いかす段階（2時間）

「いかす」段階では、練習の成果を発表し合い、学びのよさを交流することをねらいとして、単元の学習を通して高まった動き（技）を披露し合う発表会に取り組んだ。

#### < 考察 >

「ふかめる」段階で、活動グループ内で友達との肯定的な関わりを多くもつことができたため、発表会も友達の伸びを認め合い、たたえ合うような雰囲気の中で、楽しく行うことができた。

## 9 研究の成果と課題

### (1) 学習後に行ったアンケート調査の結果

問1) 学習前と比べて、マット運動は好きになりましたか。	36(人)		
	好きになった(16)	少し好きになった(13)	変わらない(7)
問2) 学習前と比べて、前転や後転などの技は上手になりましたか。			
	上手になった(14)	少し上手になった(18)	
	(※「変わらない… 2名」「少し下手になった… 1名」「下手になった… 1名」)		
問3) お手本の動画は役に立ちましたか。			
	役に立った(21)	少し役に立った(6)	分からない(8)
	(※「あまり役に立たなかった… 1名」)		
問4) 自分自身の動きの映像は役に立ちましたか。			
	役に立った(19)	少し役に立った(7)	分からない(9)
	(※「あまり役に立たなかった… 1名」)		
問5) 自分のできていないところを考えると、練習方法や場所を工夫することはできましたか。			
	できた(14)	少しできた(10)	分からない(9)
	(※「あまりできなかった… 3名」)		

### (2) 研究の成果

右の資料④は、学習後に行ったアンケートの「自分の動きの映像はどんなことに役に

見たてくらべてひさかまか、ていら、など悪い所が分かるから出来がうらになった  
どのようなか入してしたらいいかが分かった、自分とくらべることができた

【資料④】

立ったか」という質問項目に対する子どもの回答の一部である（※回答したのは、「役に立った」または「少し役に立った」を選択した26名のみ）。他の子どもの多くも同様の内容を書いていたことから、本研究において、映像を通して理想的な動きのポイントを理解させるとともに、自身の動きを客観的に分析させたことは、自己の課題を捉えるための支援になり得たと考えられる。このことは、自分の動きに対するフィードバックを他者視点からの間接的な情報に頼るしかなかった普段の体育授業と比べ、より効果的に自己の課題を捉えることができたことを示している。

いろいろな姿勢のくふうをしたり、みんなを助け合えるのがとても楽しかった  
たじろ、これから家のおとんの上などをしてほしい。前転や後転の練習

【資料⑤】A児の学習後の感想

上の資料④は、事前アンケートにおいて、体育の授業が「どちらかと言えば嫌い」、マット運動が「嫌い」と回答したA児の学習後の感想である。A児は練習方法を工夫したり、友達と協力したりすることに体育学習の楽しさを感じ、運動への関心や自ら運動する意欲を高めたことが分かる。このように、苦手意識のある運動課題であっても学習の活動構成や支援の在り方を工夫することで、子どもが「楽しい」と感じる体育科学習を実践することができるということが分かったことは大きな成果であった。

### (3) 研究の課題

本研究の副主題である「自己の課題を捉える」ことについて、子どもに自己の課題をより具体的に捉えさせるために、映像を分析する際の視点の与え方を検討する必要がある。また、「解決に向けた練習方法の見通しをもたせる支援の在り方」について、教師の支援を通して、子どもがもつ課題の解決に向けた練習方法の見通しがどんな抽象的な見通しから、どのような思考の経緯を辿り、どんな具体的な見通しへと変化したのかをいかに評価していくかが追求すべき課題である。

《参考文献》 小学校学習指導要領解説体育編（文部科学省）